

〈『歴史大衆化』について一緒に考えてみよう〉討論文

沈 哲基

原文は韓国語、翻訳：アンヨンヒ

『歴史大衆化』というテーマは、長い間歴史学界において討論されてきたテーマである。歴史を限られた少数の歴史家たちの専有物ではなく大衆と共有するということであった。それが歴史消費として現れ、博物館、記念館などで専門家を招待して行う様々なプログラムを作り出した。しかし、専門家を招待して行うプログラムは、一過性で終わってしまうことが多く、常時運営を考える博物館や記念館では他の方法を模索するようになった。つまり、短期間で養成されたドーセントや解説者によって行われるプログラムを組んでしまい、これによる副作用が発生した。学生や一般人を対象にしたプログラムがほとんどであったが、発表者が指摘するように「内容不足な部分をオーディエンスに対して刺激的で過度な民族感情や愛国心を煽ることに置き換え」てしまった。

歴史消費という面で注目されるのは、歴史コンテンツだ。歴史を大衆に知らしめ、簡単にアプローチできるようにしたという点では肯定的だが、これもまた発表者が指摘したように興味本位で行われることにより「誤った事実が拡散されたり、過度な民族主義・愛国主義」に走ってしまうこともある。こうした問題に対して、歴史学界では持続的に問題提起をしてきたが、解決のための代案提示は多くなかった。

しかし、最近になって「公共歴史 (Public History)」をその代案として提示している。これは発表者が指摘した歴史学の危機、歴史学部の存続や卒業生の就活問題といった現実的な問題に対する代案として認識されている。つまり、歴史学を「アカデミック歴史学 (Academic History)」と「公共歴史学」に分けて、それぞれ学問的な領域と大衆的な領域で展開させて行こうということだ。

しかし、まだ韓国では「公共歴史」に対して明確な概念整理がされていないと考える。「公共歴史」を歴史学の危機の代案として提起するためには「公共歴史」に対する明確な概念整理が必要である。発表者の提案文においてもその点について認識していると思われる。ついでに、提案文では省略されているが、発表者が考える韓国における「公共歴史」の概念と主な内容についてお話いただければと思う。

「公共歴史」について概念整理をすることで、従来の歴史学界の認識の転換と歴史学界が直面している現実的な困難を克服する方法を考えられるのではないだろうか。そういった面で、歴史学者と「公共歴史」分野で活動していた学芸員・作家・教師など、「公共歴史家」の関係

をどのように設定するのかは、現状において重要なことである。歴史学者が考える「公共歴史」と公共歴史家が考える「公共歴史」に対する理解が必要であり、これに対する共通の認識を模索することは、今後の「公共歴史」を定着させる際にとっても重要なことである。これに対する発表者のお考えをお聞きしたい。

また、「公共歴史家」に対する再教育が必要だと思われる。これに対する発表者のお考えと、発表者もまた再教育が必要であるとお考えなら、これらに対して体系的な再教育のために推進すべき核心事業はどんなことだと思っていらっしゃるのかご教示願いたい。

最後に「公共歴史」は、今後学問領域に入って「公共歴史学」になれるのか、学問領域になるなら、歴史学、「公共歴史学」、「公共歴史」はどのように区分しなければならないのかについてのご識見を伺いたい。さらに、大学において「公共歴史」を学問として研究し、教育できるのかについてのご高見も伺いたいと存じます。